

の乗組員負傷者の診断書。病状・処置・予後などについて記してある。三十三通（梅溪昇氏の好意による）。

⑦明治二十二年 日本生命創業初期の健康診査に関する書類。当時同生命の診査医で、その後第一生命を創始した矢野恒太署名入りの書類もある（日本生命医務部提供）。

その他容體書（診断書）、死亡診断書、手術記録、手術承諾書、処方箋などが参考となる。

最後に日々どこかで廃棄されつつある、人類の病氣との闘いの記録である、この世に唯一無二のカルテが、たとえ一部分でも保管される『診療録資料館』のごときものが創始され、貴重な遺産が研究者の便に供されることを望みたい。

（大阪府豊中市 皮膚科開業）

江戸医学館の考試弁書

『癲癇狂奔』について

——当時の精神病学説をみる——

岡田靖雄

わたしたちの精神科医療史研究会所蔵資料に『癲癇狂奔』一冊がある。これは「医学館」とすりこまれた野紙にかかれた癲癇狂に関する小論二篇をとじたもので、表紙に「癲癇狂奔」とある。それぞれの筆者の名は、あとから同一人の筆で書きいれられている。順にあげると、塩田孝昭〔？〕、吉田松庵、田村長□（虫食い）、小森西清、古田休菴、坂本養禎、桂川甫悦、岡田昌春、藤本立〔？〕運、井上齡菴、赤松久安、谷邊玄殊〔？〕、吉田周禎、多紀安琢で、残りの篇には名がはいっていない。

このうち桂川甫悦は、桂川家六代甫賢國寧の三男として一八三五年（天保六年）に生まれた。本名は國謙、のち次謙。講武所にはいり、藤澤家をつぎ、維新のころには陸軍

總裁勝安房のもとで副總裁になっていた。一八八一年（明治一四年）没。多紀安琢は元矢の倉多紀家の多紀元堅の子で、一八二四年（文政七年）に生まれ、一八五七年（安政四年）に家督を相続し奥医師となった。本名元琰。一八七六年（明治九年）没。するとこの考試弁書『癲癇狂弁』は一八五〇年ごろのものであろうか。

弁書の多くは、二〇行野紙に二枚、人により一枚または三枚で、多紀安琢だけは四枚書いている。表紙のつぎに「癲癇狂弁校字」がつけられて、「第十八 適以足資後之感 以足倒」などと各篇の文章・文字を評している。つぎにつけられている「癲癇狂弁批語」は、「第一 弁論的当 狂者枉也 不知何所本此字義 不須曲費解釈」、「第十五 穩当 但治法稍略」などと各篇の内容を評している。

各篇は白文の漢字で（一篇だけ句点つき）まだ全篇を読みくだしていませんので、比較的読みやすかったものの読み下し文を左にあげる。――

癲癇狂弁

（吉田周禎）

謹ミテ按ズルニ内経ニ黄帝問ヒテ曰ク、人生マレテ癲疾ヲ病ム者有リ、病ヲ名ヅケテ何ト曰ヒ安クノ所ニ之ヲ得ル

ト。岐伯対ヘテ曰ク、病名ヅケテ胎病ト為シ、此、之ヲ母ノ腹中ニ在ル時其ノ母大イニ驚ク所有ルニ得タリ、氣上リテ下ラズ、精氣并ビ居ルガ故ニ子ニ発シテ癲疾ト為サシムルト。綱目ニ曰ク、癲癇ハ即チ頭眩ナリ、痰膈間ニ在レバ則チ眩微ニシテ仆レズ、痰膈上ニ溢ルレバ、眩甚シク地ニ仆倒シテ人ヲ知ラズ、之ヲ名ヅケテ癲癇ト曰フト。夫レ癲癇ノ病タル之ヲ諸書ノ所説ニ考フルニ名証同ジカラズ、或ハ併言シ或ハ分言シ、風癇、風癲、癲狂ノ名指ス所一ツナラズ。内経ハ癲ヲ言ヒテ癇ヲ言ハズ。徐嗣伯ハ大人ヲ癲ト曰ヒ小兒ヲ癇ト曰ヒ其ノ実一病ナリト云フ。之ニ依リテ之ヲ観レバ癲癇ハ固ヨリ是一疾ナリ。人ニ虚実アリ病ニ緩急アリテ発スル所一様ナラズ。〔中略〕狂ノ病タル小相類スト雖モ自ラ陰陽ノ別アリ。内経ニ黄帝問ヒテ曰ク、怒狂ヲ病ム者有リ、此ノ病安クニ生ズルカト。岐伯対ヘテ曰ク、陽ニ生ズルナリト。帝曰ク、陽何ヲ以テ人ヲシテ狂ハシムルカト。岐伯曰ク、陽氣ハ暴ニ析キテ決シ難キニ因リ、故ニ善ク怒ルナリ、病名ヅケテ陽厥ト曰フト。帝曰ク、之ヲ治スルハ奈何ト。岐伯曰ク、其ノ食ヲ奪ヘバ即チ已ムト。難經ニ曰ク、狂ノ始メテ発スルヤ少シク臥シテ多ク起キ自ラ

高賢ナリトシ自ラ弁智ナリトシ自ラ倨貴ナリトシ、妄リニ
笑ヒ歌楽ヲ好ンデ妄リニ行ヒテ休マザルモノ是ナリト。蓋
シ癲癩狂ハ多ク痰心胃ノ間ニ結シテ発スル者有リ。或ハ滯
食シテ氣ヲ塞ギ或ハ風寒シテ外ヲ閉ヂ内氣鬱窒シ房勞シテ
内ヲ虚ニシテ精氣留滯シ、或ハ思慮ヲ過用シテ心情大鬱シ
テ発スル者ナリ。故ニソノ從來スル所ヲ詳カニシテ後、瀉
スベケレバ則チ瀉シ補スベケレバ則チ補シ、宜シク痰ヲ開
キ心神ヲ鎮ムベキナリ。癲癩ヲ療スル者ハ瓜蒂散、妙功十
一丸、沈香天麻湯、千金竜胆湯、茯苓補心湯ノ類ニシテ、
狂ヲ治スル者ハ清心温胆湯、柴胡加竜骨牡蠣湯、大柴胡
湯、加鉄粉三黄瀉心湯、朱砂安神丸ノ属ナリ。虚実ヲ詳カ
ニシ陰陽ヲ弁ジ宜シク証ニ随ヒテ之ヲ用フベシ。庶幾クハ
大過無カラシムコトヲ。伏シテ教諭ヲ竣ツ。

「校字」のほうでは本篇はとりあげられておらず、「批語」
には「第十七 平穩□□亦佳但瓜蒂散亦可用之発狂」とあ
る。他篇の内容も大部分は、古典の引用を中心にしてい
る。また多くが癲癩一病説をとり、「批語」もその説をお
しているようである。だが各篇の細部は一致しない。医学
館での教育は、実験にもとづく一つの説を教えることより

は、古典の理解を眼目にしたことが、これからも察せられ
る。

考試に癲癩狂がとりあげられていることは注目すべきで
あるし、当時の漢方においても、癲癩狂部門、すなわち精
神病学が独立しつつあったことをしめすのだろう。

(東京)